

## 秦始皇帝陵兵馬俑博物館についての一考察

村越 信子

### A Study of Terracotta Warriors in Armour and Horses at the Tomb of Qin Shi Huang Museum

Nobuko MURAKOSHI

#### 1. はじめに

1974年3月29日は、世界を驚かせた記念すべき日である。その日は中国・西安市で等身大の古代兵士・戦馬の俑が、8,000体以上発掘されるきっかけになった事件が起きたのである。

2,200年余り前の全世界にぬきんでていた秦の文化が、井戸掘りの最中に農夫の鍬によって掘り出されたのである。その後、発掘・研究と保存を重ね、国として「強国秦の文化」全体を博物館にしてしまったのである。

わが国でも、1994年(平成6年)に世田谷区立美術館において「秦の始皇帝とその時代展」が開催され、数体ではあったが、兵馬俑が展示されていて、その一端にふれることが出来た。これらの兵馬俑8,000体という膨大な数が、一軍陣をなしていたということが、想像してみても計り知れないものがあり驚かされる。

2,200年振りに出土されたこれらの兵馬俑は、全体で一つの軍陣を構成し、膨大な地下軍団をなしていた。それは3つの地下建造物からなり、俑坑は一号俑坑、二号俑坑、三号俑坑と命名されている。一・三号俑坑は、1979年と89年から、二号俑坑は試掘されて、広さや埋蔵物をほぼ確認した後、1994年から正式に発掘が始まっている。

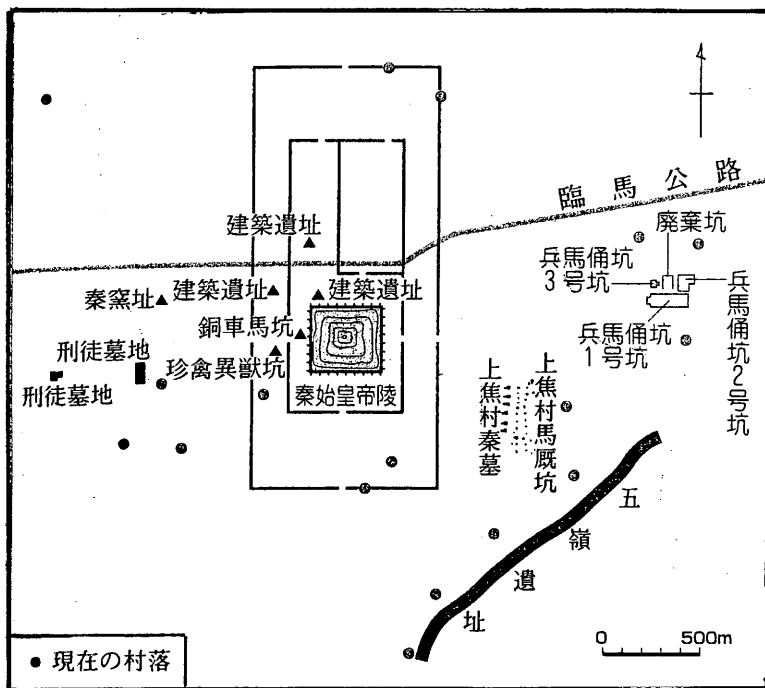
兵馬俑坑一号館、二号館、三号館、そして秦始皇帝陵の西側20mのところにある副葬俑坑内に埋もれていた2台の青銅製の馬車(見事に復元されている)を展示している「銅馬車館」を加えて、今日では「秦始皇帝陵兵馬俑博物館」として一般公開されている。

強国秦の文化は、発掘と研究が進むにつれ、兵馬俑と秦始皇帝陵そのものの不思議さは、ますます驚異的なものになっている。ここでは紙面に限りがあるので、8,000体もある等身大の兵俑をとりあげ、造形や制作過程など、製作者側から焦点をあて、少しでも中国古代の彫塑芸術を理解してみたい。なお、復元・公開されている2台の銅馬車は、秦代の冶金技術の粋を尽くした逸品中の逸品である。この銅馬車についてもふれてみたい。

## 2. 秦始皇帝陵と兵馬俑坑

秦始皇帝陵は、現在の西安市から東に約24kmにあり、渭河(イガ)の南岸、驪山(リサン)の北東の山麓に位置し、陵墓そのものは、現在は高さ46mの小さな丘をなしている。歴史と戦争(盗掘や大火)により、この始皇帝陵の本当の形状すら確認することが出来なくなっている。

もとは、円錐形、四方錐形あるいは覆斗形なのか、結論は出ていない。高さは56~115mで一周2,070mということである。この小さな丘の周りを取り囲む、正方形の内壁と長方形の外壁の跡が発見されているので、この陵墓は二重に囲まれていることになる。この陵墓の東の外壁から、さらに1.5kmほど東に、兵馬俑坑の大軍団をおさめた、3つの俑坑がかたまっている存在していたのである。(図1)



世界美術全集 東洋編2 小学館 より転写  
図1 秦始皇帝陵と兵馬俑坑位置図

現在、発掘や研究を進めながら、博物館として公開している。その面積は約2万平方Kmである。そこには、何千という等身大の兵士が、東を向いた戦闘隊形をとって、配列され始皇帝陵への侵入者を撃退するために陵の東の入口を守っていたのである。この始皇帝陵は、彼の存命中から建設が始められていたが、完成に38年の歳月を要し、70万人の労働力がこれに投入された。

発掘調査が進むにつれ、3つの俑坑のほか、一体の俑もおさめていない四号坑が発見された。この四号坑は、多分、秦帝国の滅亡によって、未完成に終わったものではないかと考えら

れている。始皇帝存命中は、大軍団が都・咸陽を守っていたのと同様に、死後も3つの俑坑が物語るように、堂々と兵馬俑の軍団が始皇帝を守るために配置されていたのである。

秦始皇帝陵兵馬俑博物館の入口を入ると、左右に陳列室、銅馬車館。次に一号俑坑、それを出ると二号俑坑、ずっと規模が小さくなるが三号俑坑と続く。一号俑坑の展示ホールは、巨大な屋内総合体育館といった感じで、長さ230m、幅62mの戦陣がすっぽり中におさまっている。坑内には兵馬俑が6,000余点、木製戦車が40余台あり、戦車と歩兵が一体となって構成された長方形の戦陣である。まるで古代兵法書の戦陣サンプルのようである。二号俑坑もほぼ同様の作戦の隊列が組まれている。

三号俑坑は、形態・内容いずれの面でも、一・二号俑坑とは異なる地下の幕舎（野外にテントを張った営舎）であることがわかる。規模も小さく、二号俑坑の1/20以下である。一号俑坑の平面図は長方形で、二号俑坑は曲尺形だが、三号俑坑の平面図は不規則な「凹」字形である。東側は長さ11.2m、幅3.7mのスロープで、それと相対する位置に車馬房（戦車と馬の部屋）があり、さらに両側にそれぞれ東西を向いた脇部屋がある。その後の調査で、ここは古代軍陣の指揮所であることが判明した。（図2）

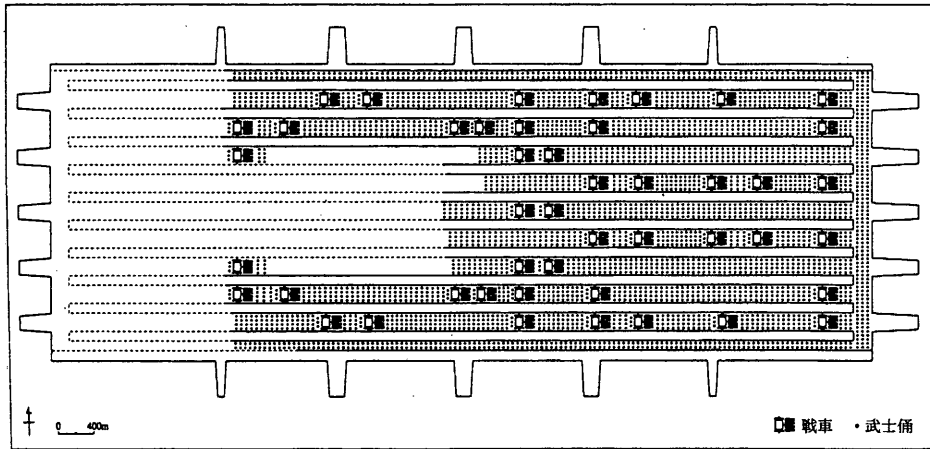
これらの3つの俑坑は、建築様式の面でいずれも地下坑道式の土木構造である。まず深さ5mぐらいの穴を掘ってから、だんだん穴の底に土を入れて地固めし、それを基礎として、土で高さ3mぐらいの隔壁をつくり、隔壁の合間に兵俑、陶馬と戦車を置き、地面に黒い煉瓦を敷き詰める。穴の四方の壁と隔壁の両側に床を敷き、床の上に等間隔に木柱を立て、木柱の上端で蘇芳を支え、蘇芳と土の隔壁の上に木材をびっしりと並べ、木材の上をむしろ、紅木、混合土、黄土との順を追って覆う。こんな手間のかかった方法で作られたのである。

### 3. 秦俑芸術の特質について

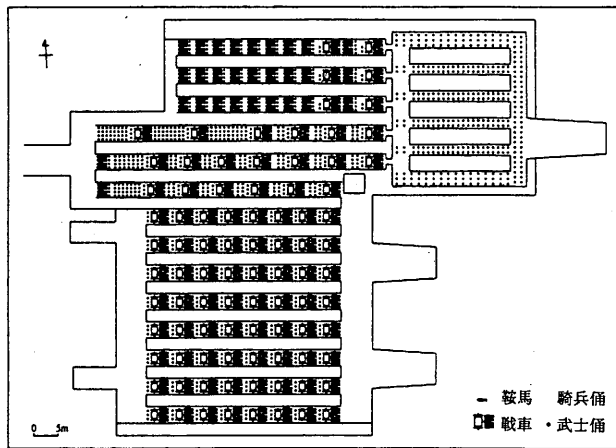
秦始皇帝陵兵馬俑坑は、豊富な地下軍事博物館であるばかりではなく、中国彫塑芸術の宝庫でもある。

(1) 秦俑が人々に与える強烈な第一印象は、スケールが雄大で、勇壮な雰囲気であることである。一・二・三号俑坑には、あわせて8,000余体もの兵馬俑があり、勇壮な大軍勢は命令一下、突貫攻撃を仕掛ける勢いが感じられ、人々に衝撃を与える。兵馬俑は全て等身大であり、数量が多いことも加わって、壮大な気概と巨大な力量を表わし、見る人を震撼させずにはおかない。

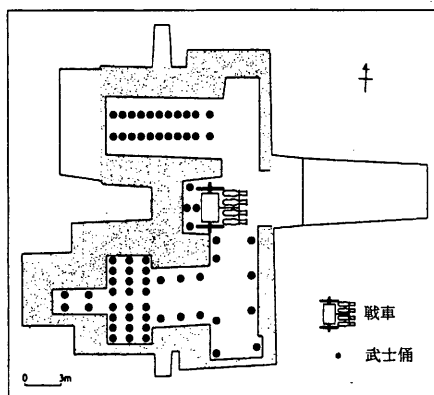
(2) 迫真のイメージと写実性に富んでいて、どれも生き生きとしている。兵士一体一体がさまざまな特徴や個性をもった、秦国の戦士たちの姿をありのままに形象している。身長、体形、顔形、髪形の描写は、実在の20～30人の基本モデルがいたであろうと学術的に推測されている。パターン（原型）の上に、細泥を二層に重ね、その上に目、耳、鼻、口などモデリングやカービングをほどこす。目を細めたり、吊り上げたり、口を結んだり、開けたりすると、1つ



一号俑坑



二号俑坑



三号俑坑

「世界美術全集 東洋編2」 小学館 より転写

図2 兵馬俑配置図



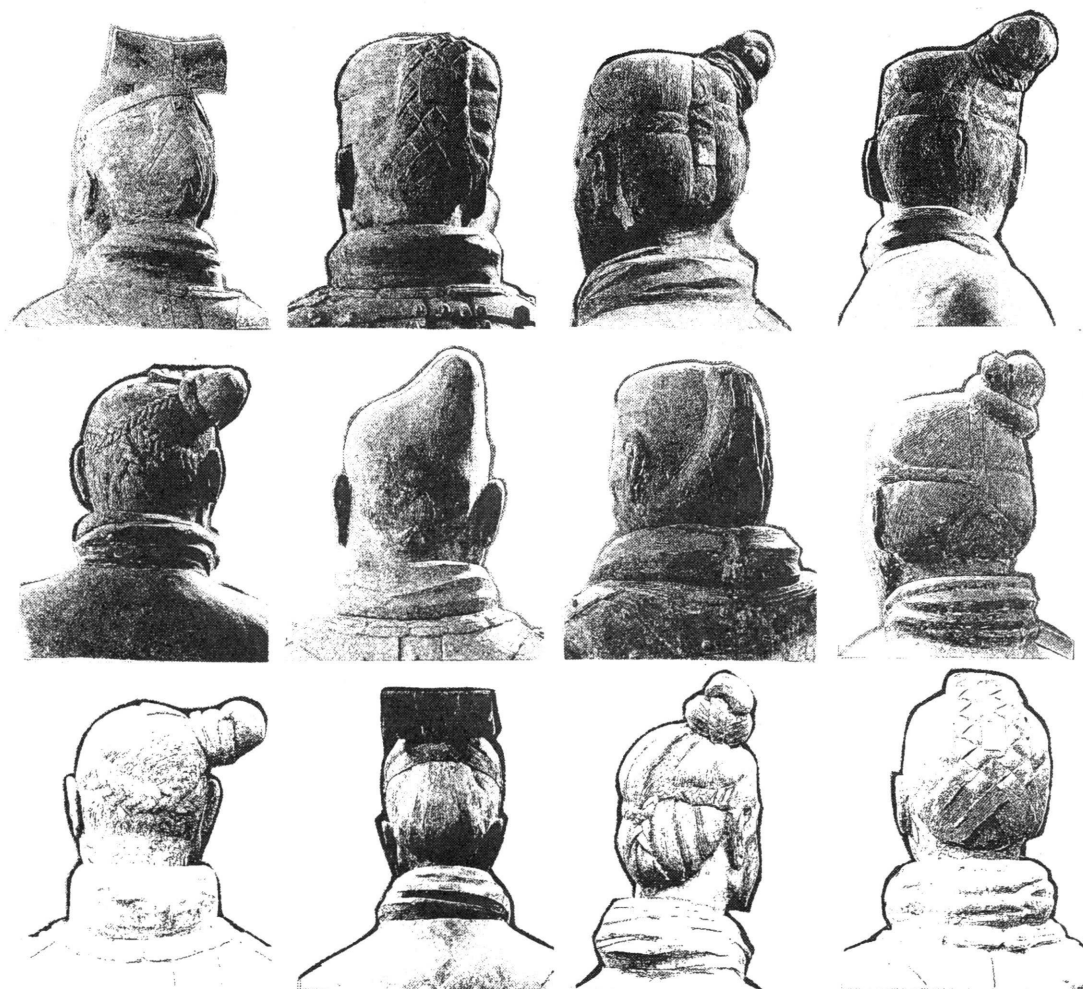
「秦始皇帝陵兵馬俑」 平凡社 より転写

図3 武士俑の容貌表現



「秦始皇帝陵兵馬俑」 平凡社 より転写

図4 武士俑の容貌表現



「世界美術全集 東洋編2 小学館 秦始皇帝陵兵馬俑」平凡社 より転写  
図5 武士俑の頭髪表現

のパターンにつき、100の表情を加えるとすると、数千の表情が出来上ることになる。唇が厚く額が広いのは、関中地区の兵士。丸顔で顎が細いのが四川地区の兵士。頬骨が高く目の小さい甘肅の兵士。鼻が高く髭が濃いのは西北地域の兵士。というように、その出身地を連想させるもので、当時の秦国軍人の地域別構成を体現している。確かに民族の多様化が見られるが、やはり圧倒的に多いのは漢民族である。漢民族は、特に体格に優れ、戦闘に強く、各軍団の主力をなしていた。兵俑一体一体の顔の表情は、他に比類ない出来映えといえるであろう。我々が体育館のような一号俑坑に入ったとき、生き生きとした表情と単なる大量生産ではなく、一体一体を真剣に取り組んで製作された重みが伝わってくるのである。そして、全てが等身大という大集団のボリュームに圧倒されるのは、このように丹念に製作過程を積み重ねてきているためだと思われる。(図3・4・5)

(3) これらの兵馬俑は、目を奪うばかりの美しい彩色絵付がなされていたそうである。また、これらの兵馬俑は、驪山山麓の粘土と石英からできている。石英を砕いて細かくし、粘土と混ぜてなじませ成型する。等身大という大きさのため、頭部、体腔、上肢、下肢、踏み板に分けて成型され、900~1,000度の温度で焼成している。首ははめ込み式になっている。俑の表面にゼラチンを塗り、それに下色(主に白)を付ける。彩色は主に鉱物を原料として使用。朱、紅、紫、淡紅、深緑、粉緑、深紫、粉紫、藍、粉藍、黄、桔黄、黒、白、赤などが使われた。色彩の調和剤は、かなり多くの膠質を含んでいた。顔料はみな平塗りで、大部分は一色塗りだが、手、足、顔の部分は、ほとんど二重三重に着色をして、より立体感を強調している。

特に、紫色の着色に使われた物質を化学分析した結果、「紫色ケイ酸銅バリウム」であることが分かり、このことは、研究者たちを困惑させている。なぜならば、この化合物は、20世紀の80年代半ばに、超電導材料の研究過程で発見されたばかりのもので、一般の化学教科書には、その名前の分子式も載っていないからだ。自然界では、天然の「ケイ酸銅バリウム」生成物は存在しておらず、俑の着色に使われたのか、研究者たちにとっても一つの研究課題が増えたことになる。<sup>1)</sup>

(4) 秦俑彫塑製作技術と焼成プロセスから、中国古代の彫塑芸術が成熟に至っていたことがうかがえる。兵士俑は高さがあり、馬俑は横に長く、泥胎(泥の素地)の製作から焼成するまで、繁雑で困難に満ちた創作プロセスがあったにちがいない。製作に携わっていた人々全てが、彫塑家ではありえないから、どのようにして、この大事業をやり遂げ、きわめて高い芸術水準に達したのか、大変不思議であり、また興味深い。

彫塑製作上もっとも大切なことは、兵俑の各部分の比率である。6,000余体の兵士俑を測定した結果、「行七座五盤三半」といわれている。立っているときは身体と頭の比率は七：一。正座するときは五：一。胡座をかくときは三・五：一という比であり、古代ギリシャの人体比例と同じ比率である。

古代ギリシアでは、前5世紀後半の彫刻家ポリュクレイトスが理想的な人間の身体各部分の比率をカノン(CANON)と呼んで、頭部の大きさを身長七分の一と決め、その後一世紀にわたってこの規格が使われていた。どちらも比率が同じということは、一番美しいと思われるバランスを熟知していたということであろう。西洋では、人体の自然美(裸体)を追求し、戦士は胸の筋肉をもって精神力を表現したが、秦代の武士俑は内面の精神力を厚い腰と丸い胸の着衣で表現している。ギリシアでは、全身の動きはS字形をなし、相反する力で構成しているのに対し、秦俑は動きはないが内在の力量を強調している。

秦俑芸術は、中国彫塑史上前代を受け継ぎ、後世へ伝えるという役割を果たし、大きな意義をもっている。そのリアリズムは、中国彫塑芸術の基本として定着し、明快で雄大な作品の風格は、漢代以降にも継承された。「絵塑結合」という中国独特の技法も、この兵馬俑を経て高度な発展をみせた。さらに、漢代以降、仏教芸術が入ってきた際にも、いちやく吸収し、中



国仏教芸術を定着させることが出来たのも、この秦代の彫塑芸術が下地を支えていたといえる

兵馬俑には、今でこそ製作したものにサインを入れるのが当り前のようだが、製作者の名前が確認できる。俑の脇の下や衣服の襷など、目立たぬところに「宮欵」「宮丙」「宮疆」など85名の製作者の名前が記されている。確認された製作者の名前の大半に「宮」という文字があるのは、彼等は皆「宮刑」(生殖器を切る刑)を受けた罪人であったと考えられる。

『史記・秦始皇本紀』には「隱宮徒刑者七十余万人、すなわち分かれて阿房宮を作り、あるいは驪山を作る」と記録されている。宮廷所属と地方政府管轄下の陶工だけでは、これだけの大量な製作はとても間に合わない。そこで「宮刑」を受けた者たちで、陶器製造や彫刻の技術を持った者を、兵馬俑の製作に動員したのであろう。この者たちのリーダーの名字の「宮」が付けられたのであろう。製作者たちも、技術的に大きな格差があったためか、作品も玉石混合で、非常に幼稚な兵馬俑も見られるようである。

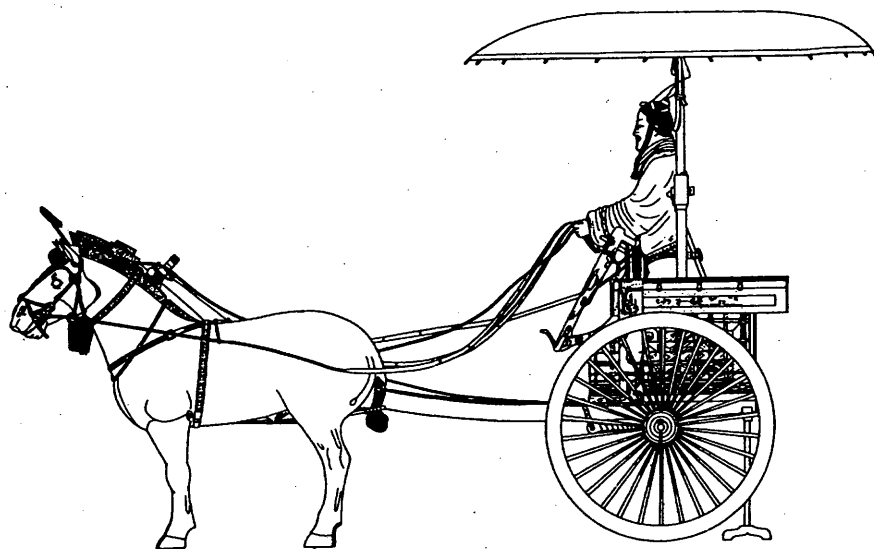
#### 4. 銅馬車について

銅馬車館に入ると、中央に1.5m位の高さがある大きな台座の上に、みごとに復元された一号銅馬車と二号銅馬車が展示されている。秦代の冶金技術の粋を尽くした、現代の技術では再現できないとさえいわれている逸品中の逸品である。(図6)

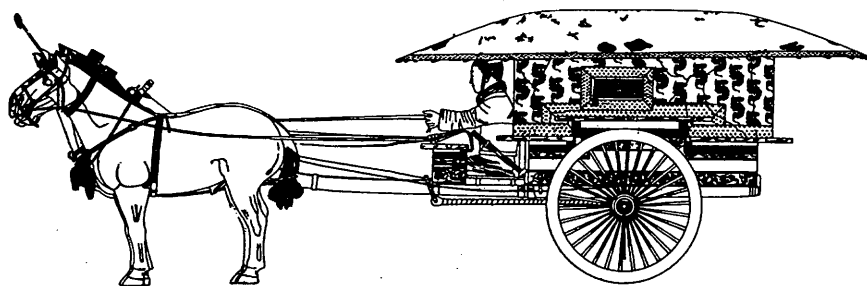
館内は、距離を置いて遠くからじっくりと鑑賞している人、近くに寄ってガラスケースに張り付くように観察している人など、時間の止まってしまった静の空間である。

1980年12月、始皇帝陵の中央近くの陪葬坑から2台の壊れた銅馬車が出土した。これらは西に向って前後して埋っていた。調査によれば、9台2列づつ18台が確認されている。銅馬車の埋蔵が予測される地域は、約2,000平方mもあるが、そのうち発掘が済んでいるのは、約1/5程度であるから全てが発掘されれば、100台位はあろうかと勝手な計算が可能である。

始皇帝は、中国統一後、全国を巡行した際には100台位の馬車を連ねていたというから、それからすれば十分考えられることである。発掘された2台の銅馬車は、すべて実物の1/2に縮小して造られている。青銅に他の貴金属を組み合わせた精巧なつくりで、写実性に富む造形力は、兵馬俑を凌ぐといってよい。4頭の馬が牽引し、一本の轆(カナエ)で馬と車体がつながっている。一号銅馬車は、御者の頭上に円形傘蓋を広げているのが特徴である。御者の後ろに、比較的大きい箱型の部屋に、半円形の大きな車蓋が低く覆っているのが二号銅馬車とされている。車・馬・御者は、すべて彩色が施され、部分的に剥落していたが、車体は、乳白色の地に紅・紫・緑・黒などで、変形竜鳳卷雲紋と雲気紋が精緻に描かれ、車衡(車と轆の端にある横木)の両端と軛(クヒキ)には模様入の銀のリングがはめられている。また、車軸には鈴、腹帯にはふさが下がっており、全体としてはきらびやかで優雅な品格をもった、華麗ななかにも純朴さが感じられる。馬は白く塗られていた。鼻孔の大きさが、肺活量の大きさを表わし、がっしりとして力強さがみなぎっている。動のなかに静があり、また、静のなかに動を含み、その



一号銅馬車



二号銅馬車

「世界美術全集 東洋編2」小学館 より転写  
図6 銅馬車

絶妙な造形による生気が、見るものには2,000年の時差をまったく感じさせない。

一号銅馬車の上部についている円形傘蓋は、機械を多用している現代の技術では造れないといわれる。傘の厚みは、中心部で約4mmで、端は約1mm。青銅製の円盤が、わずかなふくらみを持ちながら次第に薄くなっている。中心からコンパスを回して線を描いたとするとその部分の厚みの誤差は、0.1mm以下だという。まだまだ、驚くことが多いが、西安市立陝西歴史博物館には、二号銅馬車のレプリカが展示されている。秦始皇帝陵兵馬俑博物館の銅馬車とは違って、その時代の展示物の中の一つとしておさまっている。手が届くように、身近に感じられ鑑賞しやすく、写真も自由に撮ることが出来る。レプリカとはいえ本物とまったく同じように精巧にできている。2000年の歳月を経た車輪が、ベアリングが入っているかのように、滑らかに回転し、扉の開閉もスムーズに動く。この点がレプリカはとて、本物にかなわないそうである。二号銅馬車のように、屋根の部分が楕円形で、部屋の部分が正方形という構造様式は、天が丸く、地が四角いという当時の宇宙感を反映し、これに乗るとき、あたかも天と地の間に座しているという考えを表わしたそうである。

一号・二号銅馬車は、全部で3,462の部品からなり、2年半をかけて復元された。総重量は124kg。ちなみに、金の部分は700あまりで3kg以上、銀の部分は900あまりで4kgにのぼった。主体は青銅製だが、金、銀、錫さらに多くの合金が用いられた。部品の中に異なる金属が別々に鑄込まれている。収縮率の異なる金属を同じ型に鑄込むのは、きわめて高度な技術と非常に長い時間が必要だそうである。みごとな1組の銅馬車だが、この2台とも始皇帝自身の御車ではないようである。始皇帝自身の御車は、「金銀車」で6頭だてで一列に並んで牽引し、その後ろには陰陽五行に従い、それぞれ五色の「立車」と五色の「安車」を従えていたとのことである。これらの銅馬車は、始皇帝陵から約100km離れた咸陽の工房で、造られていたと考えられているが、どのような工人が、どれほどの人数で製作に携わっていたのかは分かっていない。

## 5. まとめ

従来、各種の博物館の展示物は、全て詳細に研究され尽くしたものが普通だが、この秦始皇帝陵兵馬俑博物館のように、発掘しながらの開館は大変めずらしいことである。今後も調査研究のなかからどんなニュースが飛び出してくるのか期待できる。発掘中の二号俑坑も発掘完了までまだ数年かかるが、来年をめどに武器庫館が開館するとのことで、ますます充実し大規模になっていくことであろう。発掘中の二号俑坑は、入館者にとって発掘作業の状況も一緒に見学できるというメリットがある。しかしながら、発掘側としては「入館者によって、湿度やバクテリアなどが持ち込まれるので、本来保存処理が終わるまでは、立入禁止が望ましい」ということだが、国策や国情、経済面などから、止むを得ない処置のようである。一号俑坑、二号俑坑、三号俑坑から出土した兵馬俑と銅馬車を中心に「秦の文化」を知るために論を進め

てきたが、当然ながら秦始皇帝陵そのものの存在を切り離すことは出来ない。

始皇帝陵が前代の陵墓に比べて、もっとも異なる点は、陵墓制度を取り入れたことである。それまでは、死後、人間は精神的な「魂」と肉体的な「魄」とに分かれ、魄は土に還り、魂は天に昇っていくと考えられていた。それゆえに、墓坑は深く掘るが、空間は広くとる必要がなかった。

始皇帝陵においては、靈魂が墓室内にとどまって、生前と同じ生活をするとなると、明らかに事情は違ってくる。まず第一に、靈魂が住むからには、それ相応の空間が必要になる。当然移動のための乗り物も必要になる。銅馬車は、まさに、始皇帝の靈魂が地下の世界を巡行するための乗り物なのである。さらに、その靈魂を守るための備えも必要になる。それゆえに、武器を持って防衛する8,000体という膨大な量の兵馬俑が出土したのである。守るべきは、敵の靈魂からであり、おそらくは、始皇帝が滅ぼした東方六国の靈魂に対する備えであったのであろう。人間の形を写し取った兵馬俑の大軍団によって、自分の陵墓を守らせるために、即位と同時に、この大事業に着手し、死ぬまで造営を続けさせたのである。この大事業を成し遂げるために、製作にあたった数万の兵士にとっては、過酷な労働と屈辱の仕事であったかもしれない。しかし、結果的には、2,200年後の人々にとって兵馬俑や銅馬車について、知る手がかりを残し、製作現場の一端を垣間見せてくれたわけである。

世界の宝庫とまでいわれる、これら秦代の芸術は、前代を受け継ぎ、後世へ伝えるという大きな役割を果たした。数々の中国独特の技法を生み、現代の化学者たちを困惑させた「ケイ酸銅バリウム」が俑の着色に使われていたという痕跡を残している。

秦始皇帝陵兵馬俑博物館の見学を終えてみると、強烈な印象はスケールが雄大で、勇壮な雰囲気であるが、この印象は、秦という時代そのものを写していると思えるのである。

## 6. 結び

20世紀も70年代に入って、中国の陝西省西安市の東、臨潼省にある秦始皇帝陵のふもとで、等身大の古代兵士・戦馬の俑が大量に発掘され、「世界の七不思議」の次に列挙される「世界の八番目の不思議」として、世界中にビックニュースとして報道された。この巨大な地下軍団の威容を見るために、世界各国の政府首脳をはじめ、大勢の人々がこの地を訪れている。やっと機会に恵まれ、この巨大な軍団に対面することができた。まず、一号坑を収めた巨大な体育館の様な建物に驚かされ、そしてその中の等身大の兵士たちの一団に圧倒され、震えを感じた。我々にとっては、特に信じ難い歴史的な時の長さ、空間の奥の深さがこの国にはある。

秦始皇帝陵兵馬俑坑は、中国だけの遺産だけでなく、世界の偉大な遺産である。まだ発掘が続いているので、博物館の規模は拡大されていくであろう。さらに新しい発掘により、歴史的な定説が覆えられることもあり得るだろう。

## 謝 辞

執筆にあたり、ご校閲を賜りました中里喜子教授に深く感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) 岳南：秦・始皇帝陵の謎。東京。講談社現代新書。1994。p. 151より引用。

## 参考文献

- 1) 世界美術大全集 東洋編 2。東京。小学館。1998。
- 2) 岳南：秦・始皇帝陵の謎。東京。講談社現代新書。1994。
- 3) 陳瞬臣：図説古代中国5000年の旅。東京。日本放送出版社協会。1987。
- 4) 田辺昭三：秦始皇帝陵兵馬俑。東京。平凡社。1983。
- 5) 秦の始皇帝の地下軍団。中国旅游出版社。